

山岸 裕  
石井 哲夫 編著

書くことによって得たもの

# 自閉症克服の記録



書くことによつて得たもの

# 自閉症克服の記録

山岸 裕  
石井 哲夫 編著

## 著者略歴

### 山岸 裕（やまぎし ゆたか）

1960年、神奈川県に生れる。磯子中学を中途退学。  
社会福祉法人嬉泉の「原宿のびろ学園」に入園。現在、「袖ヶ浦ひかり学園」に在園中。

### 石井 哲夫（いしい てつお）

1927年 東京に生まれる  
1950年 東京大学文学部心理学科卒業。1967年日本社会事業  
大学教授。  
社会福祉法人「嬉泉」常務理事。  
著 書 『しつけの再発見』（主婦の友社）  
『児童臨床心理学』（垣内出版）  
『自閉症児の治療教育』（小児医事出版）  
『自閉症児がふえている』（三一新書）  
『自閉症児の治療と教育』（三一書房）  
現住所 神奈川県川崎市高津区向ヶ丘1157の5

## 自閉症克服の記録

定価1400円

1988年 3月31日 第1版第1刷発行

Printed in Japan

編 著 者 山 岸 裕  
石 井 哲 夫  
©1988年

発 行 者 荒 木 和 夫

印 刷 所 文 栄 印 刷 株 式 会 社

製 本 所 株 式 会 社 鈴 木 製 本 所

発 行 所 株 式 会 社 三 一 書 房

東京都文京区本郷2-11-3

電 話 03 (812) 3131 ~ 5 番

振 替 東 京 9-8 4 1 6 0 番

郵便番号 113

落丁・乱丁本はおとりかえします

0036-882010-2726

## まえがき

裕さんは積極的に生きてきた。やきものをやき、パン販売をし、俳句をつくり、文筆をものにし、やまびこの会で知り合った同年輩の友人と語ったり、恋をしたり、お母さんと山歩きをしたり、そして今は、袖ヶ浦ひかりの学園の近くのガソリンスタンドで働くことを学んでいる。給料はもらえないが、ひとつひとつの仕事に力をこめている。スタンドのオーナーの奥さんが裕さんと一緒に働いて、「この人は、普通の人より真面目で純粋で裏面がなく、安心して働いてもらえる」と言っていて喜んでくれている。

このところ裕さんの発達はめざましい。子どもの発達とは異っていて、社会化の働きの発達とでも言うべきものであろう。自閉という障害の残影とも言うべき「思い込み」や「ささいなことだわり」が感じられることもあるが、この社会の現実を穏かに受け入れてきている。その点からみて、私は裕さんが自閉の克服をして来たことを知り、畏敬の念にうたれるのである。

よく、障害をもつ人のプライバシー云々といながら、自分の関わっている障害児・者たちのことを闇の中に秘している。とくに精神発達障害児については親の代弁性を殊更強めてしまった

り、ヒューマニズムを楯にして、自己の仕事を個人的な場所に留めてしまい、社会からの隔離を行って来てしまっている。

本人は幼い時から「自閉症」と呼ばれ、その障害に苦しめられてきた。社会は決して暖かいものではなく、いつも不安であり、脅かされて来た。そしてその経験は、本人だけが知るものとして、そのお母さんですら対立する存在となり、理解出来るものではなかった。とくに、登校拒否や家庭内暴力の厳しさは本書にその一端を知らされているが、当事者としては、大変な人生だったことであろう。その頃、裕さんを担当した中学の先生にお会いしたことがあったが、先生方は全く困り果てていたようであった。私は先生方の述べられる学校の事情をきき、同情もしたが、裕さんの側に立っては、「何とか受け入れて欲しい」とくり返すだけであった。ここにも一般社会の暴力とも言うべき排除の意向が示されていたのである。

よくその頃、「自閉症は大きくなって、精薄か精神分裂病になる」などという、おかしいことが言いふらされていた。その中で、裕さんの発達成長は奇跡的であり、私たち関係者はどんなに力づけられたことか、想像し難いことであろう。中でも裕さんの読書力と文筆による表現力の伸びは目をみはるものがある。中学で登校拒否をおこし、その後、学校というところに行ったことのない彼は、その間の生活はモラトリアムで、本当に好きなように暮らしていた。袖ヶ浦のびろ学園に入園して来たころ、言葉はボソボソとつぶやき、過敏ですぐに驚き、はずかしがり、動揺してしまった。服装はだらしなく、下着をハミ出させ、顔も洗わずヒゲも剃らなかつた。ただ、原

宿の日本社会事業大学の「のびろ学園」で指導を担当していた山崎順子さんが、そのまま袖ヶ浦のびろ学園で受け継ぎ、又、現在も袖ヶ浦ひかりの学園で引き継いでいるということが彼にとってもよかったことだったと思われる。その点、回想すれば、彼は私たちとの関わりでは、ラッキーな経験を得たのではないかと思われる。

東京の子どもの生活研究所では、開設間もないめばえ学園で小林祐子さんや島野雅子さんから体当り的な指導を受けた。私たちの治療（受容と交流）もまだ緒に付いたばかりで、裕さんは損われることなく、まず、溢れるばかりの知的な興味を育てていった。しかし、彼には十分な社会的な学習、就中自閉症の致命的な点と言うべき、人間関係の学習が途絶えていたので、受容された環境では、他の能力は育っていったであろうが、常に周囲との摩擦を避けるわけにはいかなかった。袖ヶ浦のびろ学園に辿りつくまで、それでも多くの学校の先生や家族の苦勞で、それなりの目をかけてもらえたし、われわれも何とかお母さんの相談相手となっていたように思われる。

社会福祉施設が管理される場所であり、自由を束縛される場所であることは言うまでもない。

彼は袖ヶ浦ひかりの学園にいて、園生（嫌なひびきの言葉だが、一般に通用しているので使っている）として過ごしている。私は彼が認識出来る限り、ごく普通の人としての暮しをさせたいと思って来た。

社会の風は冷たく、そう容易に彼を受け入れてはくれないだろう。だが、彼は今、社会参加に挑戦している。私は施設の中にあっても彼等に社会の目が届くようにしたいと考えている。そし

て彼に試みたことはいくつかある。

社会の目が届く機会として私が考えたことは次のとおりである。

- 1 在宅地域活動の機会  
やまびこ会
- 2 自活の生活の機会  
田中君と二人でチロリンアパート（単身者寮）で自活生活をしている。
- 3 作業選択の機会  
パン販売、コーヒーサービス、ガソリンスタンド
- 4 趣味の機会  
陶芸、英会話、俳句
- 5 社会と接触する機会  
NHKのテレビ放送の出演、千葉県自閉症児親の会に意見発表  
袖ヶ浦町の青年学級に通う

少なくとも私は彼を特別に考えず、社会の目が届くように気をつけ、かつ、くふうしたつもりである。

そして、彼の文筆の才能に注目して、二人の共同出版を企画したのである。つまり、今まで自閉症児に関わる数多くの本が出されているが、その当事者からの発言が全くない。その渦中にあった本人はどういうことを感じているのであろうか。ひとつには、あまりにも普通の人には理解出来ないこの世の不公平があるということ、生まれた時から、本人の力では回復出来ない差別状況におかれているということを知ってもらいたい。

私自身も今まで数多くの自閉症にかかわる書物を出版したが、裕さんの原稿を読んで、その不足を補ってくれるものが数多くあるということも知らされた。

さて、本の出版に関して、いろいろな人の意見をきいたが、まずわかってくれる人が少なく、ひとりだけまず並はずれた理解を示してくれた人がいた。それが、私の自閉症関係の書物『自閉症児の治療と教育』を出版してくれた三一書房の林順治さんであった。ただ裕さんの原稿はそのままでは意味が通らないところもあり、文章のくふうや校正などに喜多民子さんの力を借りることにした。この本は喜多民子さんの文筆の才によっているところ大である。

なお、裕さんのお母さん、小林祐子さん、島崎雅子さん、山崎順子さんという関係者の友情執筆も大きな役割を果たしていただいていることも併せて感謝いたしたい。

昭和六三年二月

石井 哲夫



# 自閉症克服の記録／目次

まえがき

## 第一章 幼き日々より

11

\* 母の回想1——裕が生まれて

山岸陽子

11

● 当時の記録から（嬉泉年報No.2より抜粋）

15

★ 解説1 自閉症と呼ばれる子どもたち

石井哲夫

23

一 仲間になりたい——初めての幼稚園

34

二 小学生の頃のこと

38

1 学校との出会い

38

2 もっと気ままに暮らしたい

39

3 お母さんが鬼みたいに見えたとき

42

4 僕たちの気持をわかってくれない先生

43

5 心に残る先生との触れ合いと別れ

45

★ 解説2 自閉症児をよりよく育てるために

石井哲夫

48

\* 母の回想2——公立中学校に入って

山岸陽子

69

## 第二章 思春期

75

一 ある朝の決断（登校拒否） 75

二 俺をのけものにするな 78

三 近隣とのトラブルと白い目 81

四 性のめざめ 85

五 荒れた心 86

六 閉ざす心 90

七 心のオアシス 92

八 母の底力 96

九 甦える心 98

## ★ 解説3 思春期の問題

石井哲夫

## 第三章 青年期

111

一 新生活のスタート 111

二 学園生活から 116



解説 4 施設療育について

石井哲夫

142

三 異性への憧れ

152

四 社会への目

160

1 レザークラフトを通して

160

2 ボランティアの人たちに言いたいこと

163

3 なぜ私は山へ行くのか

165

五 家族を想う

167

1 親への反乱

167

2 父親について

169

3 兄弟・姉妹について

170

4 姪が生まれて

171

1 グループ活動

116

2 ひらがなを書くようになったきっかけ

120

3 園外での交流

123

4 牧場の手伝いをして

126

5 パン販売に学ぶ

130

6 学園の友のこと

136

六 親が死ぬ時、私の将来 173

第四章 自分自身を見つめながら

一 緊張のメカニズム 177

二 電車の美学 185

三 人と会話し触れ合うことの難しさ 196

四 自閉症児へのしつけについて思う 199

★ 解説5 裕くんの自己分析に学ぶ

石井哲夫

第五章 裕くんへ

一 裕くんとの出会い 小林祐子 211

二 どん底からはい上がった裕くん 島野雅子 214

三 青春を生きよう ボランティアの人からの手紙 220

## 第一章 幼き日々より

### \* 母の回想1——裕が生まれて

山岸陽子

幼い裕くんのプロフィールは、どのようなだったか、お母さんの回想や当時の記録で、思い出してみたい。

裕は二千二百グラムの未熟児で生まれてきた。一年生の長女がいた。哺育器の中から出て胸に抱くと、ホワッと笑ったような気がした。ミルクをよく飲み、よく眠り、あまり泣かなかった。枯れ木のようなだった手も足も、丸々と肥り、一歳頃は、標準以上の体重になっていた。

その頃気になったのは、反応のなさだった。呼びかけても、こちらに返ってくるものが

\* 母の回想1——裕が生まれて

ない。知能の遅れを疑い、少しずつ不安がしのびよってきた。まわりのことには関心を示さないで、とても静かだった。泣いたり笑ったりをしない子だった。近所の人に「赤ちゃんは元気ですか。ちっとも声がきこえないわね」と言われたりした。「ゆうちゃん」と呼んで返事のないのが、一番気がかりだった。

歩きだしたのは一歳半。言葉は二歳頃、単語がなんとか。一人遊びが大好き。絵本、積木、組み立て玩具、パズル。やり出すと集中して一心にやっている。それが嬉しくて、集中している時は、なるたけ注意が散らないように気をつけていた。

手仕事が好きだったその頃の私は、裕が一人遊びをしている傍で、刺しゅうや縫い物をしているのが楽しい時間だった。字を覚えたり、パズルをすることで知的なものは遅れていないと、単純に考えていたかもしれない。

夫は会社、長女は小学校に行った後は、裕と二人だけの生活。田んぼの造成地にボツンと建った家で、隣り近所との交流は挨拶程度。不安はあっても、おとなしい子どもだから、もう少し様子をみようと思っていた。

二歳頃のこと、裕が初めて地下鉄に乗った時、火がついたように泣き叫んだ。どこかが痛いかにように絶叫のような声だった。まわりの人もびっくりして「どこが悪いのではないか」と声をかける人もいた。慌てて地上に出ると、泣きやみ、ケロッとしていた。あの頃の私には、その時の裕の気持がわからず、どうしてあんなに泣いたのか、ずいぶん考え

こんだものだ。

二歳半過ぎて、言葉の遅れが気になっていた。単語が十語くらいで、呼びかけや二語文にならない。どこに相談したらよいのだろう。評判をきいたわけでもなく、およそあてずっぽうに、武蔵野日赤病院に行ったのは、冬の寒い日だった。

あの日が裕にとって重大な日であったことが、今になってよくわかる。耳鼻科からすぐ「子どもの相談室」にまわされた。保育室のように暖かさのある部屋で「発達の遅れがあるかもしれないから、半年毎に診ましよう」と言われた。

さあー発達の遅れをとり戻しましょう、とばかりに、ハリキリ出した。今できていないことをできるようにさせなくては、躰けもほとんど身についていないし。「生活習慣の自立」が私の頭の中にドッカと住みついて、追い立てる。大小便の自立も遅れていた。特にウンチの時、トイレや便器でするのを嫌がり、パンツの中にしていた。つい、お尻をたたく。そういうことを平気でやった。だからこれは、後をひいて、オネシヨと共に、小学校に入っても自立できなかった。

三歳ぐらいから、それまでおとなしかった子が、とたんに、手に負えない子になっていた。よく言えば自己主張。言い出したらきかない、自分がやりたいようにする。すべてが急にそうなっていた。歩く道も、きまった道順でないと歩かなくなった。違った道になると、立ち止まって騒ぎ出す。

家にいて、好きなこと（パズル、積木）をしている時以外は、落ち着かなくて、すこしもじっとしていることができなかった。電車に乗っても、よそのお宅に行っても、走り回っている。いたずらをするというのではなく、お尻に火がついたような感じで動き回っていた。

三歳半の定期診断で、脳波を調べ、「てんかん」の波が出ていることがわかった。何も知らない未熟な母にとっては、大変なショック。服薬を続けることが大事と言われたが、その薬を日に三度飲ますことは難しい作業だった。飲むことを拒んで口を結んでいる裕。しっかりと抱いて、口を開かせようとすると、ふりほどいて逃げ出してしまふ。必死になればなるほど、うまくいかない。多分その時の私は、ものすごい顔で、迫力で迫っていたのだろう。裕から見れば、恐ろしいだけだっただろう。

「子どもの相談室」で、月一回、平井信義先生のカウンセリングが始まった。子どもは治療室、母親は五、六人で先生を囲んで話し合う。そこで初めて「自閉症」という言葉を聞いた。子ども同士の触れ合いが大事なことで、親は子どもを受け入れて、優しく接することを教わった。

裕には同年輩の子どもがまわりにいない。関心もまったく示さない。子どもを受け入れる、とはどういうことなのだろう。わがままをそのままきいていたら、野放図な人間、何でも思い通りになると思う人間になってしまわないだろうか。親の育て方が悪いと言われ